

## 全国家族調査の質問項目の使用頻度

松 田 茂 樹

### I. 目 的

全国家族調査（以下「NFRJ」）は、これまでに NFRJ98（1999 年 1 月実査）と NFRJ03（2004 年 1 月実査）の 2 回実施されている。これらのデータは、すでに東京大学社会科学研究所の SSJ データアーカイブに寄託されており、学会内外の研究者に広く利用されている。

現在、NFRJ08 実行委員会（実行委員長：稲葉昭英首都大学東京准教授）が組織され、3 回目の調査にあたる NFRJ08（2009 年 1 月実査予定）に向けた準備が進められている。同実行委員会の下位組織には、デザイン班、サンプリング班、調査票班、クリーニング班の 4 班があり、各班に割り当てられた課題を検討している。

このうち筆者が所属する調査票班（代表：嶋崎尚子早稲田大学教授）では、具体的な質問項目の検討を行っている。本稿では、調査票班の活動の一環として、NFR98 と 03 を使用した論文で用いられた質問項目の頻度を分析した結果を報告する。

日本家族の時系列調査である NFRJ の基本的性格は、毎回同一の質問を行い、その変化の趨勢をとらえることにある。また、時代状況に応じた新たな質問も行い、家族とそれを取り巻く社会環境が変容する中で、新たな課題を把握するという性格も併せ持つ。この性格を踏まえると、NFRJ08 の質問項目を作成するためには、次の点が検討課題となる。第一に、基本的に同一の質問を継続するとはいえ、調査票の量的制約がある中

では、NFRJ08 において採用する既存質問を取捨選択する必要がある。これは、時代情勢の変化や新たな質問項目を追加する必要性からも、求められる作業である。第二に、新たな課題を把握する新規質問の作成である。無論、新規に採用された質問には、今後継続的に調査される項目も含まれる。

ここで、第一の課題に対処するためには、既存質問の妥当性や意義とともに、その活用度もみる必要がある。活用度とは、NFRJ を使用した論文における既存質問の使用頻度である。活用度が高い質問は、設計当初の意義は別として、それが分析されて結果が世に公表されないという意味で、相対的に意義は低いだろう。また、その背後には、測定方法の妥当性や粗さの問題から、論文での活用が阻まれている可能性がある。このように、活用度をみると、既存質問を再検討する手がかりを提供する。

また、本学会をあげて行っている NFRJ は、学年会員にとって家族研究を行うための公共財といえる。本稿は、質問の使用頻度という点から、公共財の活用のされ方を公開する意義もある。

### II. 方 法

#### 1. 対象論文

分析対象とした論文は、NFRJ98 と 03 を使用した既発表論文 147 本である。内訳は次のとおりである。第一は、全 7 巻からなる NFRJ98 二次報告書に収録された論文 59 本である。第二は、渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容—全国家族調査[NFRJ98]による計量分析』（東京大学出版会）に収録されている 21 本

まつだ しげき：第一生命経済研究所

## 研究動向：全国家族調査の質問項目の使用頻度

>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>

の論文である。第三は、全2巻からなるNFRJ03二次報告書に収録された論文27本である。第四は、SSJデータアーカイブからデータの提供を受けて執筆され、本データを作成した2006年9月までに成果が報告された論文40本である。このうち、NFRJ98が使用されている論文は122本、NFRJ03が使用されている論文は32本である。なお、基礎的集計結果の報告が中心であるNFRJ98および03の第一次報告書は、分析対象から除外した。

### 2. データと分析方法

上記論文をもとに、1つの論文を1ケースとし、その論文において使用されたサンプルと質問項目の情報を入力した変数をそなえる個票データを作成した。1ケースには、各論文が使用した、①データ(NFRJ98, 03)、②サンプル(性、年齢)、③質問項目の変数がある。いずれもダミー変数である。

分析方法は、各変数の単純集計である。サンプルの使用状況は、NFRJ98と03をプールして行う。質問項目の使用頻度の分析結果は、NFRJ98とNFRJ03別に示す。

なお、NFRJ03は学会内において利用が公開されて日が浅いため、まだ使用した論文が少ない。このため、NFRJ98の分析結果を中心に報告し、NFRJ03の使用頻度は参考値とする。NFRJ98の質問項目の使用頻度をみる際、それが使用された論文全体の5%以下にあたる、使用頻度6回以下の、本稿では相対的に使用頻度が少ない質問とする。

### III. サンプルの使用状況

まず、NFRJ98と03で使用されたサンプルの特徴を述べる。男女両方のサンプルを使用した論文は119本、男性サンプルのみを使用した論文は12本、女性サンプルのみを使用した論文は16本である。多くの論文は、男女両方のサンプルを使用している。

使用された回答者本人の年齢は、39歳以下が

86.4%、40歳代が85.7%、50歳代が83.0%、60歳代以上が73.5%である。高齢サンプルの使用頻度が若干少ないものの、ほぼすべての年齢層が分析に活用されている。

### IV. 変数の使用頻度

#### 1. 本人・世帯

本人・世帯に関する質問は、大きく、本人基本属性、同居者属性、本人就業状態、収入に分けられる。これらの変数は、被説明変数と説明変数の両方として使われることが多いため、使用頻度は総じて多い。

具体的には、本人基本属性としては、性、年齢、生育地、住居形態、最終学歴があげられる。同居者属性としては、人数、続柄がある。NFRJ98と03では質問が異なり、03では世帯表形式で質問されている。

本人の就業状態の質問の使用頻度が表1である。いずれの変数も使用頻度は総じて多い。特に、就業経験、現職の従業上地位、職種、労働時間、通勤時間の使用頻度が多い。初職の職種なども、ライフコース研究などで多く使用されている。本人の就業状態の質問の中で相対的に使用頻度が少ないので、NFRJ98にある結婚に伴う就業形態変化や子どもの誕生にともない就業形態が変化した時期を尋ねた質問(変数名「本人親なり経歴変化時期」「本人結婚による経歴変化」)である。

本人収入、世帯収入の使用頻度も総じて多い。NFRJ03で新たに設けた家計の経済的ゆとりを主観的に尋ねた質問も多く使用されている。

NFRJは、本人と世帯の状態を尋ねる質問を多数設けている。これらの使用頻度が総じて多いことは、家族を分析する際に細かな属性情報が不可欠であることを示す。

#### 2. 配偶者

配偶者に関する質問は、大きく、基本属性、就業状態、夫婦関係に分けられる。NFRJを使用した論文には、夫婦間のサポート関係、家事・育児分担、関係満足度を扱った研究が多い。また、配

&gt;

表1 本人の就業状態の質問の使用頻度

変数名	調査票の問番号			使用回数(回)		98と03の 違い
	98	03若年	03中高年	98	03	
本人就業経験有無	8	6	6	33	1	—
本人現職有無	8	6	6	47	11	—
本人現職従業地位	8-1	6-1	6-1	41	10	—
本人現職職種	8-2	6-2	6-2	39	7	—
本人現職規模	8-3	6-3	6-3	8	0	—
本人親なり経歴変化	19	6-4	6-4	7	1	質・カ
本人親なり経歴変化時期	19-1	—	—	6	—	—
本人結婚による経歴変化	18	—	—	6	—	—
本人現職労働日数	8-4	6-5	6-5	5	1	—
本人現職労働時間	8-5	6-6	6-6	22	4	—
本人現職通勤時間	8-6	6-7	6-7	15	2	—
本人初職時期	9(1)	—	—	10	—	—
本人初職従業地位	9(2)	—	—	9	—	—
本人初職職種	9(3)	—	—	10	—	—
本人初職規模	9(4)	—	—	7	—	—

注) —: 該当質問なし, 質: 質問文・形式変更, カ: カテゴリー変更

偶者関係の質問は、他の変数を分析する際の説明変数としても多用されている。このため、これらの質問は総じて使用頻度が多い。

具体的には、配偶者の基本属性には、結婚経歴、結婚時期、最終学歴、就業経験、現職などがある。配偶者の就業状態は、基本的に本人と同じ質問項目である。

配偶者の基本属性と就業状態のうち使用頻度が少ないものは、現職規模(NFRJ98で3回、以下同)、労働日数(2回)、夫婦の苗字(2回)である。NFRJ98の夫婦の苗字の回答結果は、「夫方の姓」(93%)、「妻方の姓」(5%)、「夫婦で別々の姓」(0.4%)、「その他(夫婦養子など)」(0.3%)である。苗字の使用頻度が極めて少ないのは、夫方の姓以外の者が現状で極めて少なく、単純集計以外での質問を使用することが難しいためとみられる。苗字は子どもやきょうだいについても尋ねているが、総じて使用頻度は少なかった。

夫婦関係の質問の使用頻度は表2である。同伴行動は、夫婦一緒に夕食を食べる頻度と買い物・ショッピング(以下「買い物」)に行く頻度を尋ねているが、いずれも使用頻度が少ない。夕食の使

用頻度が少ない背景には、夕食を夫婦一緒に食べる回数が伴侶性の高さをあらわす指標であるかという妥当性のほか、回答の分散が小さいためにその差を分析することが難しいという技術的な問題がある。買い物についても、日用品の買い物であれば家事になるが、いわゆるショッピングであれば伴侶性になるという点で、両義的な質問である。

配偶者からのソーシャル・サポートを尋ねる質問は、使用頻度が多い。ソーシャル・サポートの質問は、悩み事、評価、助言の3項目の合成尺度として使用されている。一方、夫婦間の意見の食い違いを測る質問は、夫婦間の勢力関係を見るものであるが、ほとんど使用されていない。本質問が勢力関係を測定しているかという妥当性の問題もある。

家事分担の質問には、食事の用意から掃除、子どもの世話まであるが、総じて使用頻度が多い。家事の具体的な測定項目は、NFRJ98と03で大幅に入れ替えている。

夫婦生活の満足度を尋ねる一連の質問も多くの論文で使用されている。ただし、満足度の質問群

## 研究動向：全国家族調査の質問項目の使用頻度

&gt;

表2 夫婦関係の質問の使用頻度

変数名	調査票の問番号			使用回数(回)		98と03の違い
	98	03若年	03中高年	98	03	
同伴行動夕食	16-14(ア)	—	—	3	—	—
同伴行動買い物	16-14(イ)	—	—	6	—	—
ソーシャル・サポート悩み事	16-16(ア)	9-15(ア)	9-15(ア)	16	11	—
ソーシャル・サポート評価	16-16(イ)	9-15(イ)	9-15(イ)	16	10	—
ソーシャル・サポート助言	16-16(ウ)	9-15(ウ)	9-15(ウ)	16	10	—
意見の食い違い	16-17	—	—	1	—	—
家事分担食事の用意	16-15(ア)	9-16(ア)	9-16(ア)	28	8	—
家事分担食後あとかたづけ	—	9-16(イ)	9-16(イ)	—	5	—
家事分担買い物	—	9-16(ウ)	9-16(ウ)	—	5	—
家事分担洗濯	16-15(イ)	9-16(エ)	9-16(エ)	27	8	—
家事分担風呂掃除	16-15(ウ)	—	—	24	—	—
家事分担掃除	—	9-16(オ)	9-16(オ)	—	7	—
家事分担子どもと遊ぶ	—	9-16(カ)	—	—	6	—
家事分担子の世話	—	9-16(キ)	—	—	6	—
家事分担孫・子の世話	16-15(エ)	—	—	17	—	—
家事分担看病・介護	16-15(オ)	—	—	8	—	—
満足度育児	16-18(イ)	9-17(ア)	9-17(ア)	10	3	質
満足度親への態度	—	9-17(イ)	9-17(イ)	—	2	—
満足度家事	16-18(ア)	9-17(ウ)	9-17(ウ)	8	3	質
満足度家計運営	16-18(ウ)	9-17(エ)	9-17(エ)	6	1	—
満足度性生活	16-18(エ)	9-17(オ)	9-17(オ)	7	1	—
満足度夫婦関係	—	9-17(カ)	9-17(カ)	—	9	—
満足度結婚生活	16-18(オ)	—	—	18	—	—
トラブル	29(ア)	9-18	9-18	1	3	カ
結婚経歴	17	9-19	9-19	17	2	—
初婚時期	17-1	—	—	11	—	—
死別時期	17-2	—	—	4	—	—

注) —: 該当質問なし, 質: 質問文・形式変更, カ: カテゴリー変更

の中では、家計運営と性生活の満足度の使用頻度が相対的に少ない傾向がある。

夫婦間におけるトラブル（やもめごと）の有無を尋ねる質問の使用頻度は少ない（1回）。トラブルの質問は、夫婦間のみならず、子ども、父母、義父母、きょうだいにも設けられているが、いずれも使用頻度は少ない。夫婦間などにおけるトラブル発生の状況は、家族研究における重要な研究課題のひとつみられるが、実際には使用されていない。この理由としては、第一に、トラブルの有無はその関係の良さをあらわすが、関係の良好さや満足度を測る質問は他にあることがあげられる。第二に、トラブルで問題になるのは、それが

どのような内容（例：DV、金銭的いさかい、家事分担をめぐる葛藤など）であり、またその強度・深刻さであるが、既存質問ではそれが把握できていないことがあげられる。

その他、配偶者と死別した経験がある人のその時期を尋ねる質問の使用頻度は少ない。

### 3. 子ども

子どもに関する質問の使用頻度が表3である。まず、子どもの属性についてみると、人数、年齢、居住距離、最終学歴、婚姻状態などの基本属性の使用頻度は総じて多い。しかし、「あなたと同じ姓か」であるかを尋ねた子どもの苗字（3回）、就業状態（2回）の使用頻度は少ない。就業状態の使

&gt;

表3 子どもについての質問の使用頻度

変数名	調査票の問番号			使用回数(回)		98と03の違い
	98	03若年	03中高年	98	03	
子どもの有無	24	16	16	59	20	—
子どもの人数	24-4	16	16	56	16	—
子どもの年齢	24(1)	16(1)(イ)	16(1)(イ)	46	16	—
子どもほしいか	—	24	—	—	0	—
子どもほしい人数	—	24-1	—	—	0	—
子ども性別	24-1(1)	16-1(ア)	16(ア)	12	4	—
子ども居住距離	24-5(ア)	—	16(ウ)	17	1	カ
子ども苗字	24-5(イ)	—	—	3	—	—
子ども最終学歴	24-5(エ)	16-1(ウ)	16(エ)	7	2	カ
子ども就業状態	24-5(オ)	—	16(オ)	2	1	—
子ども婚姻状態	24-5(カ)	—	16(カ)	8	1	—
子ども遊ぶ頻度	—	16-1(エ)	—	—	1	—
子ども教える頻度	—	16-1(オ)	—	—	1	—
子ども夕食頻度	—	16-1(カ)	—	—	1	—
子ども会話頻度	24-5(ウ)	—	16(キ)	4	0	カ
子ども金銭援助・受	28(1)(ア)	—	16(ク)	3	0	質
子ども非金銭援助・受	28(2)(ア)	—	16(ケ)	4	0	質
子ども金銭援助・与	28(1)(ア)	—	16(コ)	3	1	質
子ども非金銭援助・与	28(2)(ア)	—	16(サ)	4	0	質
子どもトラブル	29(イ)	46-1(キ)	16(シ)	1	1	質
子ども良好度	24-5(キ)	16-1(ク)	16(ス)	8	1	—
子ども家族認知	24-5(ク)	—	—	7	—	—
子どもしつけ	—	16-2	—	—	4	—
子ども子どもを持つことの意味	—	23	—	—	2	—
子ども子の結婚経験有無	24-2	—	—	7	—	—
子ども子の結婚経験最初の子	24-3	—	—	3	—	—
子ども子の結婚経験時期	24-3	—	—	3	—	—
子ども同伴行動	24-6	—	—	10	—	—

注) ー: 該当質問なし, 質: 質問文・形式変更, カ: カテゴリー変更

用頻度が少ない背景には、第一に子どもが就業している者は本人が高齢者である場合に限られること、第二に現状の質問は、仕事についている/在学中/無職の3つのカテゴリーで就業状態を尋ねており、詳しい就業状態はわからないこともあるとみられる。

子どもとの相互作用を尋ねる会話頻度、金銭の授受、金銭以外の授受の質問は、使用頻度が少ない。この理由としては、特に会話や金銭以外の授受では、この質問が問題になるのは、本人と離れて暮らす子どもであることがあげられる。また、小遣い以外で、親子の金銭的授受が問題になるのは、主に子どもが成人になって以降である。

こうした事情から、これらの質問の分析対象は、回答者が中高齢者になる。NFRJ03では、これらの質問は、中高年票——本人が48歳以上の者が対象——のみで尋ねるように変更されている。しかし、NFRJ03は、公開後間もないとはいえ、これまでこれらの質問はほとんど使用されていない。

なお、NFRJでは、同様の質問項目を用いて本人と親との間の相互作用も尋ねている。成人子と親の相互作用研究が盛んなこともあり、こちらは使用頻度が高い。会話頻度、金銭の授受、金銭以外の授受は、中高年の親側から回答してもその子側から回答しても結果は対称になるため、いずれ

研究動向：全国家族調査の質問項目の使用頻度

>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>

表4 父母、義父母、きょうだいの質問の使用頻度

変数名	調査票の問番号			使用回数(回)		98と03の 違い
	98	03若年	03中高年	98	03	
<b>父母</b>						
父母健在/死亡、年齢	25(イ)	17	17	27	5	—
父母実親かどうか	25付(ア)	17-1(ア)	17-1(ア)	4	2	—
父母就業有無	25付(イ)	17-1(ウ)	17-1(ウ)	0	2	—
父母居住距離	25付(ウ)	17-1(エ)	17-1(エ)	27	11	カ
父母会話頻度	25付(エ)	17-1(オ)	17-1(オ)	6	3	—
父母最終学歴	5	17-1(カ)	17-1(カ)	13	6	カ
父母金銭援助・受	28(1)(イ)	17-1(キ)	17-1(キ)	6	1	質
父母非金銭援助・受	28(2)(イ)	17-1(ク)	17-1(ク)	9	3	質
父母金銭援助・与	28(1)(イ)	17-1(ケ)	17-1(ケ)	7	1	質
父母非金銭援助・与	28(2)(イ)	17-1(コ)	17-1(コ)	6	2	質
父母トラブル	29(ウ)	17-1(サ)	17-1(サ)	3	2	質
父母良好度	25付(オ)	17-1(シ)	17-1(シ)	7	2	—
父母代表職	6	—	—	14	—	—
父母家族認知	25付(カ)	—	—	10	—	—
父母夫婦関係の確認	—	17-2	17-2	—	2	—
<b>義父母</b>						
義父母健在/死亡、年齢	27(イ)	19	19	14	0	—
義父母就業有無	27付(ア)	19-1(イ)	19-1(イ)	0	0	—
義父母居住距離	27付(イ)	19-1(ウ)	19-1(ウ)	15	6	カ
義父母会話頻度	27付(ウ)	19-1(エ)	19-1(エ)	5	1	—
義父母最終学歴	—	19-1(オ)	19-1(オ)	—	1	—
義父母金銭援助・受	28(1)(エ)	19-1(カ)	19-1(カ)	4	0	質
義父母非金銭援助・受	28(2)(エ)	19-1(キ)	19-1(キ)	5	1	質
義父母金銭援助・与	28(1)(エ)	19-1(ク)	19-1(ク)	4	0	質
義父母非金銭援助・与	28(2)(エ)	19-1(ケ)	19-1(ケ)	4	0	質
義父母トラブル	29(オ)	19-1(コ)	19-1(コ)	0	1	質
義父母良好度	27付(エ)	19-1(サ)	19-1(サ)	5	1	—
義父母家族認知	27付(オ)	—	—	8	—	—
義父母夫婦関係の確認	—	19-2	19-2	—	0	—
<b>きょうだい</b>						
きょうだい有無	26	18	18	21	8	質
きょうだい人数	26-1	18-1	18-1	24	8	—
きょうだい出生年	26-2(イ)	18(2)(イ)	18(2)(イ)	12	2	—
きょうだい性別	26-2(ア)	18-2(ア)	18-2(ア)	13	4	—
きょうだい居住距離	26-2(エ)	18-2(ウ)	18-2(ウ)	3	3	カ
きょうだい最終学歴	—	18-2(エ)	18-2(エ)	—	1	—
きょうだい会話頻度	26-2(オ)	18-2(オ)	18-2(オ)	6	2	—
きょうだい婚姻状態	26-2(カ)	18-2(カ)	18-2(カ)	6	0	—
きょうだい金銭援助・受	28(1)(ウ)	18-2(キ)	18-2(キ)	2	0	質
きょうだい非金銭援助・受	28(2)(ウ)	18-2(ク)	18-2(ク)	2	1	質
きょうだい金銭援助・与	28(1)(ウ)	18-2(ケ)	18-2(ケ)	1	0	質
きょうだい非金銭援助・与	28(2)(ウ)	18-2(コ)	18-2(コ)	2	1	質
きょうだいトラブル	29(エ)	18-2(サ)	18-2(サ)	1	1	質
きょうだい良好度	—	18-2(シ)	18-2(シ)	—	2	—
きょうだい苗字	26-2(ウ)	—	—	1	—	—
きょうだい家族認知	26-2(キ)	—	—	8	—	—

注) —: 該当質問なし、質: 質問文・形式変更、カ: カテゴリー変更

&gt;

の側からも基本的には分析ができるが、これまでの分析は主に本人が子側から行われている。

#### 4. 父母、義父母、きょうだい

父母、義父母、きょうだいについての質問の使用頻度が表4である。これらの使用頻度の特徴は次のとおりである。

第一に、該当者の有無、年齢、数、居住距離という基本属性の質問は、父母、義父母、きょうだいのいずれも使用頻度が高い。

第二に、父母に関する変数の使用頻度は総じて多い。ただし、父母の就業有無の使用頻度は少ない。NFRJの対象である本人が28歳以上の者では、親は無職である場合も多いことと、先述した子どもの場合と同様に就業有無のみでは詳しい就業状態が不明であることも理由である可能性がある。

第三に、基本属性を除くと、義父母ときょうだい、特にきょうだいの質問項目の使用頻度は低い。きょうだいの相互作用などが少ない背景には、この分野の研究情勢のほか、NFRJ03では、一番目のきょうだいと金銭的な授受が発生している度数は全サンプルの5%であり、30万円以上の金銭の授受では1%と少ないことも関係しているとみられる。二番目以降のきょうだいでは、それらの度数はさらに少ない。ちなみに、筆者は育児期の親を対象にきょうだいの育児支援の研究も行っている。しかし、NFRJでは、「金銭以外の援助」として尋ねているため、それが育児支援、情報提供、相談などの何であるかという相互作用の中身はわからない。

第四に、各関係において尋ねているトラブルの有無と、きょうだいの苗字の使用頻度は少ない。トラブルについては、先述したような質問的な課題があるとみられる。

これ以外に、知覚されたサポート・ネットワークを尋ねた質問（NFRJ98:問30）があるが、この質問の使用頻度は高い（表割愛）。

#### 5. 意識・心理状態

意識・心理状態の質問には、ディストレス尺度

(NFRJ98:問23)、ストレーン(同:問21)、家族意識(同:20)がある。

ディストレス尺度は、NFRJ98は16項目、03では12項目からなる尺度である。NFRJを使用したストレス研究が盛んになされたため、この項目の使用頻度は高い（NFRJ98で19回）。

ストレーンは、「子どものことで悩んだこと」など7項目からなる。ディストレスほどではないが、ストレーンの使用頻度も高い。ただし、「職場での仕事の負担が大きすぎると感じたこと」(4回)、「職場や仕事上で「自分が理解されていない」と感じたこと」(1回)の2項目の使用頻度は少ない。

家族意識の質問としては、NFRJ98は6項目、03は9項目がある。これらの項目は、大きく、①性別役割分業規範（「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」など）、②家意識・老親扶養規範（「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていくなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」など）、③家族形態規範（「愛のない夫婦は離婚すべきだ」「未婚者でも、お互いに強い愛情があれば、性的な関係をもってもかまわない」）に分類できる。このうち、①と②の使用頻度は多く、特に「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」という項目はNFRJ98で36回使用されている。しかし、家族形態規範の2項目の使用頻度は相対的に低く、03では他の項目が使用される中でこれらは使用されていない。家族形態規範の現質問が、今日の規範研究からみて妥当であるか再検討が必要かもしれない。

#### V. おわりに

本稿では、NFRJ98と03を使用した論文で用いられた質問項目の頻度を分析した。現在、98と03の結果を受けて、NFRJ08実行委員会で新しい調査票の検討を進めている。本分析は、その作業に向けて、質問の連続性を維持しつつも、既存質問の取捨選択や改変の余地があることを示唆する。

## 研究動向：全国家族調査の質問項目の使用頻度

>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>

第一に、対象が誰であれ、基本属性の質問の使用頻度は多い。これは、本人、父母、義父母、子、きょうだいの詳細な基本属性は、家族研究において不可欠であることを示す。基本属性の質問は紙面を必要とするが、今後とも、この部分には紙面を割き、詳細に尋ねることが求められよう。ここで、NFRJ03までは子どもと親については就業の有無を尋ねているものの、就業形態は不明である。彼らの就業の有無の質問を就業形態の質問に代えるなどして、属性情報を増やすことは検討課題だろう。

第二に、NFRJは、本人からみた2者間で、父、母、子、きょうだいなどとの関係を尋ねることを基本設計としている。各関係についての質問は、属性から相互作用などに至るまで原則同じ質問が繰り返されている。この設計方法は、SSMやJGSSなどわが国的主要調査にみられない特徴であり、2者関係で調べていく点は08においても踏襲されるとみられる。しかし、先の分析結果は、本人からみた2者間の関係すべてについて、同じ質問を適用することには、限界もあることが示唆された。本人からみた各対象者とのかかわりを2者関係として尋ねることと、すべての2者関係について同一の質問を行うか否かは別次元のことだろう。①2者関係すべてについて同一の形式で尋ねる質問と、②対象に応じて変える質問または対象によっては尋ねない質問、を仕分けするか否か

が検討課題とみられる。

第三に、現状では、離家した成人子と親との間でもっぱら問題となる金銭的援助や金銭以外の援助の授受などの相互作用を、本人からみた親側と子側の両方について同一質問で尋ねている(NFRJ03では中高年票のみ)。成人子と親との相互作用は、いずれの側からも分析可能であるが、現状ではもっぱら親との関係の分析が行われている。この状況をみると、例えば、本人からみて親側との相互作用を厚く、詳細に尋ね、子側との相互作用は成人子についての質問は薄くすることも考えられる。

第四に、使用頻度が少ない質問項目の再検討があげられる。具体的には、トラブルの有無、本人との苗字の異同、夫婦間の意見の食い違い、家族形態規範、夫婦同伴行動、職場におけるストレインがあげられる。使用頻度が低い背景には、これらの変数を質問する対象の妥当性、変数の妥当性、問題や現在の家族研究において求められている項目との乖離についての問題がある可能性がある。

最後に、本稿で行った質問の使用頻度の調査・分析を、今後も本学会で継続的に行っていくことを提案したい。これは、NFRJの成果報告であるほか、想定した質問が実際に有効に利用されているかを検証し、調査票を見直す手がかりを与えるものである。